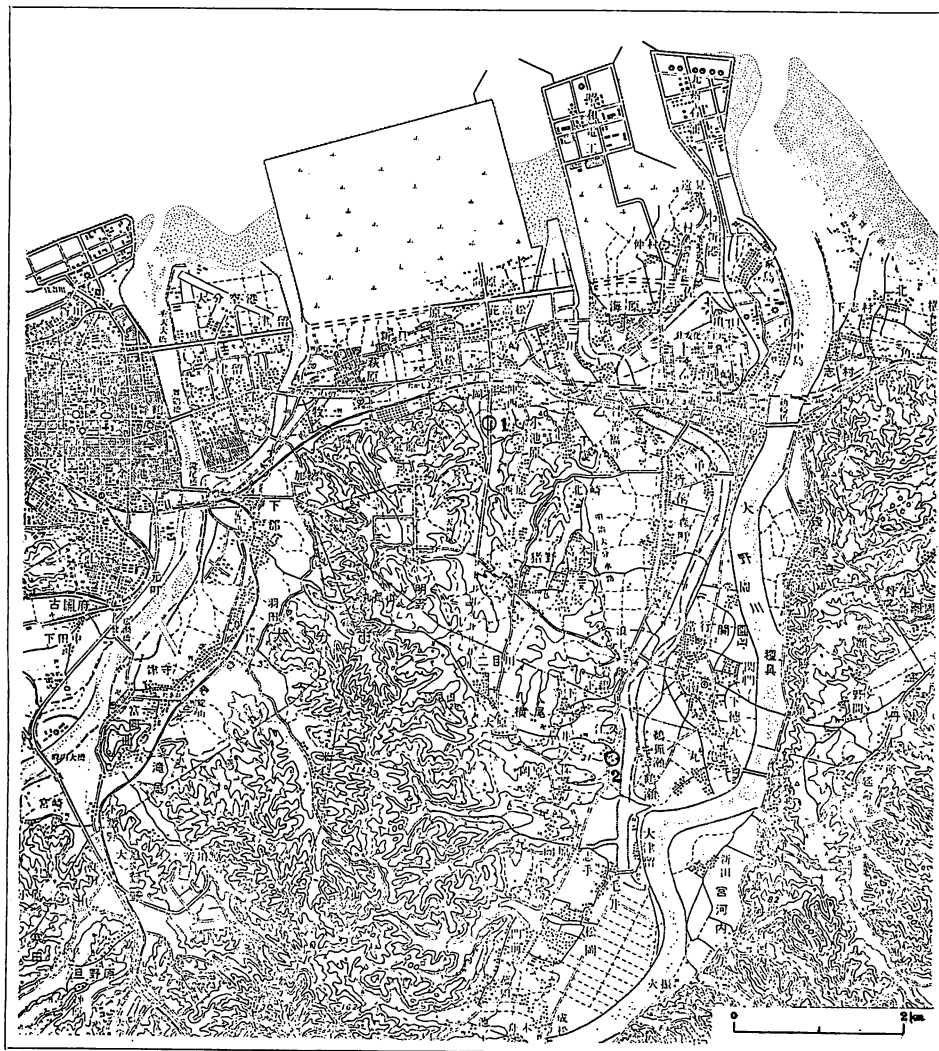


小池原貝塚・横尾貝塚出土の自然遺物について

小池史哲

1. はじめに

大分県の別府湾に面した南側の沿岸，大分市に所在する縄文文化時代の貝塚として小池原貝塚・横尾貝塚の2貝塚が知られている。現在は新産都計画等で自然環境が著しく破壊されているが、か



第1図 小池原貝塚(○印1)・横尾貝塚(同2)付近地形図

っては豊かな水産資源等を得るには格好の場所であったと思われる。本稿ではこの2貝塚より出土した自然遺物について記載し、これから縄文文化時代食料採集活動の性格について考えてみたい。

従来小池原貝塚・横尾貝塚に関しては、発掘調査が行なわれており、^(註1)記述もみられるのにかかわ^(註2)らず、自然遺物関係のものについては記述がほとんどないのが現状である。また酒詰仲男の『縄文石器時代食料総説』によって卓越した研究がみられながらもこれらの貝塚の資料に触れられておらず、爾来記述のみられないことは残念でならない。

現在、別府大学文学部考古学研究室に、両貝塚発掘調査の際に任意採集された自然遺物が保存されており、この機会に整理分類し、報告書の補充を兼ねたい。

2. 小池原貝塚の自然遺物

貝類

class Gastropoda 腹足類

- | | | |
|---|-------|---|
| 1 | バテイラ | <i>Tegula (chlorostoma) pfeifferi</i> (Philppi) |
| 2 | サザエ | <i>Turbo (Batillus) cornutus</i> (Solander) |
| 3 | ヘナタリ | <i>Cerithidea (Cerithideopsis) cingulata</i> (Gmelin) |
| 4 | ウミニナ類 | <i>Batillaria</i> sp. |
| 5 | ツメタガイ | <i>Neverita (Glossaulax) didyma</i> (Roding) |
| 6 | アカニシ | <i>Rapana thomasiona</i> (Crosse) |
| 7 | バ　　イ | <i>Babylonia japonica</i> (Reeve) |
| 8 | テングニシ | <i>Hemifusus ternatanus</i> (Gmelin) |
| 9 | サツマピナ | <i>Oliva annulata</i> (Gmelin) |

class Pelecypoda 斧足類

- | | | |
|----|---------|--|
| 10 | サルボウ | <i>Anadara (Scapharca) subcrenata</i> (Lischke) |
| 11 | アカガイ | <i>Anadara (Scapharca) broughtonii</i> (Schrenck) |
| 12 | ベンケイガイ | <i>Glycymeris (veletuceta) albolineata</i> (Lischke) |
| 13 | マ　　ガ　　キ | <i>Crassostrea gigas</i> (Thunberg) |
| 14 | マシジミ | <i>Corbicula (Corbiculina) leana</i> (Prime) |
| 15 | ヤマトシジミ | <i>Corbicula (S.S.) japonica</i> (Prime) |
| 16 | ハマグリ | <i>Meretrix lusoria</i> (Röding) |
| 17 | ヒナガイ | <i>Dosinia (Dosinorbis) bilunulata</i> (Reeve) |
| 18 | オキシジミ | <i>Cyclina orientalis</i> (Sowerby) |

魚類

class Pisces 魚類綱

- | | | |
|---|--------|-----------------------------------|
| 1 | ネズミザメ類 | <i>Limnidae</i> gen. & sp. indet. |
|---|--------|-----------------------------------|

- 2 エ イ 類 *Mayliobatidae (or Dasyatidae) gen. & sp. indet.*
 3 マ グ ロ 類 *Thynnus orientalis (Temminck & Schlegel) sp. indet.*
 4 マ ダ イ *Chrysphrys major (Temminck & Schlegel)*
 5 ク ロ ダ イ *Mylio macrocephalus (Basilewsky)*
 6 マ フ グ 類 *Tetraodontidae gen. & sp. indet.*
 7 イ シ ガ キ フ グ *Chilomyterus affinis (Günther)*

爬虫類

class Reptilia 爬虫綱

- 1 ウ ミ ガ メ 類 *Chelonia sp.*

哺乳類

class Mammalia 哺乳綱

- 1 イ ノ シ シ *Sus scrofa leucomystax (Temminck & Schlegel)*
 2 ニ ホ ン シ カ *Cervus nippon nippon (Temminck)*
 3 ク ジ ラ 類 *Cetacea family indet.*
 4 イ ル カ *Delphinus (SP.) delphis (Linne)*
 5 タ ヌ キ *Nyctereutes procyonoides viverrinus (Temminck)*
 6 オ オ カ ミ 類? *Canis Hodohylax*
 7 イ ヌ *Canis familiaris var japonicus (Temminck)*

小池原貝塚における自然遺物は以上のように貝類18, 魚類7, 爬虫類1, 哺乳類7の合計33種類に及び、貝類中のアカガイ、ベンケイガイが貝輪として検出されている例を除いても31種類になる。これらの各遺存体の割合は任意採集のために確かな出現率を示さないが、貝類では、ハマグリ、マシジミ、ヤマトシジミ、マガキが多く、以下、アカニシ、ツメタガイ、テングニシ、ウミニナ、ヘナタリ、バイ、オキシジミ、サザエ、サルボウ・ヒナガイ・サツマビナ・パテイラの順になる。魚類では、クロダいの顎骨17, マダいの顎骨10, マフグの顎骨1, イシガキフグ顎骨1, エイの尾棘骨3, マグロの背椎骨3, サメの背椎骨3等であり、哺乳類では、圧倒的にイノシシ、シカが占めるがイヌの約4体分の顎骨が、みられることは注目される。イルカ、クジラの背椎骨は各1つつ検出された。

3. 横尾貝塚の自然遺物

貝類

class Gastropoda 腹足類

- 1 サ ザ エ *Turbo (Batillus) cornutus (Solander)*
 2 カ ノ コ ガ イ *Clithon sowerbianus (Recluz)*
 3 カ ワ ニ ナ *Semisulcospira bensoni (Philppi)*

- 4 ヘナタリ *Cerithidea (Cerithideopsis) cingulata* (Gmelin)
 5 ウミニナ類 *Batillaria, sp.*
 6 ツメタガイ *Neverita (Glossaulax) didyma* (Röding)
 7 イボニシ *Tclavigera* (Küster)
 8 アカニシ *Rapana thomasi* (Crosse)
 9 バイ *Babylonia japonica* (Reeve)
 10 テングニシ *Hemifusus ternatanus* (Gmelin)

class Pelecypoda 斧足類

- 11 ハイガイ *Anadaru (Tegillarca) granasa* (Linnaeus)
 12 マガキ *Crassostrea gigas* (Thunberg)
 13 マシジミ *Corbicula (Corbiculina) leana* (Prime)
 14 ハマグリ *Meretrix lusoria* (Röding)
 15 オキシジミ *Cyclina orientalis* (Sowerby)

魚類

class Pisces 魚類綱

- 1 スズキ *Lateolabrax japonicus* (Cuvier & Valenciennes)
 2 マダイ *Chrysphrys major* (Temminck & Schlegel)
 3 クロダイ *Mylio macrocephalus* (Basilewsky)
 4 マフグ類 *Tetraodontidae gcn & sp. indet.*

哺乳類

class Mammalia 哺乳綱

- 1 イノシシ *Sus scrofa leucomystax* (Temminck & Schlegel)
 2 ニホンシカ *Cervus nippon nippon* (Temminck)

横尾貝塚出土の自然遺物は以上の貝類15, 魚類4, 哺乳類2の合計21種類であり, 採集資料が少ないため, 管見にもれたものもあるかと思われる。貝類の個体数で一応の順序をつければ, ハマグリ, マシジミが30, 32と多くカキ16, アカニシ11, ツメタガイ5, オキシジミ3, テングニシ, ヘナタリ2, バイ, ウミニナ, カワニナ, カノコガイ, サザエ, イボニシが1個体分という順になる。但しハイガイについては報告書に記述があるが保存資料の中にはみられなかった。魚類ではクロダイ顎骨7の他, スズキ, マダイ, マフグ共各1点の顎骨がみられ, 獣骨はイノシシの方が若干多い様である。

4. 自然遺物よりみた狩猟漁撈活動について

小池原貝塚・横尾貝塚は, 付図に示すように東を大野川河口, 西を大分川河口に挟まれた鶴崎丘

陵上にあり、それぞれこの丘陵の北端大野川河口寄り、丘陵東端大野川に面する台地に位置し、直線距離で約4.2km、尾根道では約5kmの相互距離である。

筆者が実査することの出来た両貝塚の自然遺物は動物遺存体のみであって植物遺存体は全くみられなかったし、従来の記述にも植物遺存体はみられないので、自然遺物のうえでの植物質食料採集活動に関する考察を行うことは不可能である。^(註5)従って、縄文文化時代の他の食料採集活動、即ち狩猟活動・漁撈活動について私見を述べることにする。

狩猟活動は、石鏃が小池原貝塚に2点、横尾貝塚に1点出土しており弓矢が使用されたとみられる。ただ両貝塚ともに石鏃等の出土例が少ないのは一つに貝層部分のみの発掘によると思われるが、他に弓矢以外の捕獲方法を考慮しなければならないかもしれない。捕獲対象物は、通常本州の縄文文化時代の貝塚・岩陰等にもみられるように、シカ・イノシシ・タヌキ・オオカミ等の森林棲の中・小形獣類である。小池原貝塚においてはニホンイヌがみられ、^(註6)食人の風習と共に食用とされたとの見方もできるが、狩猟犬として使用されたと考えたい。これらは食種としてのみならず衣料や漁具・装身具の材質としても重要な役割を果しているものであり、殊に石器が少ない点を考えると骨角器文化とまで行かないにせよ骨角類を加工して代用していたと考えられないことではない。

漁撈活動の形態としては、小池原貝塚に単式無鐵釣針・骨製刺突具・石錘等が、横尾貝塚に単式無鐵釣針・石錘等が出土しており、これらの漁撈具を用いての内湾性・外洋性の両形態が考えられる。

両貝塚の魚類遺存体・海棲哺乳類遺存体から、それぞれの生態に注意すれば、クロダイ・マダイ・フグ・スズキ・エイ等は沿岸底棲魚類であり、マグロ・サメ・イルカ・クジラ等は沖合廻游魚類に分類される。沿岸底棲魚類は、定着魚であり珪藻が繁殖する岩礁帯を一定の游泳範囲で索餌し航海性はもたないため比較的容易に捕獲される。

沿岸底棲魚類の内、エイは下層魚であり、フグは上層魚に分類され、フグ等は容易に漁撈対象になったであろう。マダイについてみれば、マダイは捕餌するとその餌をすぐ呑み込むことはしない魚類として有名であり、小形の釣鉤ではどうしても共に吐き出される恐れが多いといわれる。ヤス等による捕獲を一応考えることが出来るが、単式の無鐵型の釣針のみの出土例から考慮して、捕獲方法についての検討が要求されよう。一つの例として浮鯛といわれる様に、マダイが水温の変化によって自由に游泳することが出来なくなったものは時として手でも捕採出来るとされるものがあげられる。^(註7)スズキ・クロダイは沿岸でも淡水が流入する部分、則ち河口を好むことが知られている。

沖合廻游魚類についてみれば、カツオは初夏の頃南海から廻游して来るものとして知られイワシやイカを捕餌することが常であり瀬戸内海にも魚群を追って入って来たと考えられる。サメは嗅覚の発達した魚で海中で血の匂いをかぐと何100mの先からでも集まるといわれ、他の魚をヤス等で突いた際に寄ってくることも考えるのである。ホシザメ等は日本の沿岸や内湾にも多くみられイカ・タコ・エビ・カニ等を常食する。イルカは舟が近づいても離散せず、むしろ集来する習性をもっている。^(註8)鋸等を投射することが可能であるとされるが、小池原貝塚の幼稚な漁撈具で捕獲するためには相当な闘いが想像できる。イルカは鯨や魚群を追って内湾にも入って来ることがあり、ゴ

ンドウ（イルカ類）等は一般にみられる様に獐猛さはなく割合におとなしく、これも内湾にみられる。サメ・イルカ・クジラ等も獣類同様、衣料・装飾品等の日用品の材質として利用されたことは当然考えられうることである。しかし、現在のところ漁撈具の出土は少なく、魚獲対象では沿岸底棲魚類の捕採が主であったと考えられるので、横尾貝塚の魚類遺存体はそれを明示しており、小池原貝塚においても、確かに別府湾に廻遊する沖合廻遊魚類を捕獲したことは明らかであるとしても、それほど量的に豊富ではない等から、両貝塚の漁撈活動としては沿岸底棲魚類と貝類の捕採等という程度の小規模なものであったと考えられる。

貝類についてみれば、岩礁性とされるサザエ・バテイラ・マガキがみられ、この内マガキについては岩礁性の海でなくとも礫の多い砂浜であっても多棲しており、サザエは有棘のものか無棘のものか、蓋のみの資料からは判断することが出来ない。干潟のものとしてウミナ・サルボウ・ハイガイ・ハマグリ・オキシジミ等があげられ、浅海のものとしてサツマビナ・テングニシ・アカニシ・バイ・ツメタガイ・アカガイ・ベンケイガイ・ヒナガイ、河口付近にヘナタリ・カワニナ・ヤマトシジミ、淡水はカワニナ・カノコガイ・マシジミ等があげられる。小池原貝塚はヤマトシジミ・ヒナガイ・バテイラ・サツマビナ・サルボウ・アカガイ・ベンケイガイが横尾貝塚にみられないものとし、逆に横尾貝塚でのマシジミ・ハイガイ・カワニナ・カノコガイ等がみられない。この相対比から小池原貝塚の方が鹹度の高いところから、横尾貝塚は淡水系のところからの捕採が想像される。これは両貝塚の立地条件に大体相応している様である。

漁場の問題について考えれば、小池原貝塚の生活者は鶴崎丘陵の北端部を主な漁場とし、前面に広がる小入江は内湾砂泥性、入江をへだてた西側の岬にあたる部分は多分に岩礁性の要素を有し、北側の別府湾に直接面するところは岩礁性と共に浅海的要素・沖合的要素をも含んでいる様で、この部分の沿岸を漁場としたとみられる。横尾貝塚の方は、鶴崎丘陵の東部大野川河口に面した部分の岩礁性の部分砂泥性の部分と変化に富んだ条件で、加えて貝塚の南の小谷（中尾川が流れている）の淡水系要素の部分の部分を主な漁場としたと考えられる。

それぞれ貝塚付近に漁場を求められるが、貝類の捕採・植物質食料の採集は女性が受け持ち魚類の捕採や狩猟は男性の分担と考えられ、狩猟等の面をも考慮し生活領域について考えてみれば、女性の場合は前述の様に居住地よりそれほど離れることなく、男性の場合にのみ狩猟のために遠出を（註10）するとして、大体この時代の生活者の一日の行動範囲は約3～数Kmであったとすれば、小池原貝塚の方は西南方の丸尾山麓が限度かと思われ、横尾貝塚の方は西方の高尾山麓一帯及びその南部の丘陵尾根地帯が主な狩猟の場であったとみられる。

狩猟・漁撈活動について自然遺物から考えられることをを含めて自然遺物をまとめてみたが、貝塚の研究等にあつて土器編年研究の偏見たる態度から一步の高揚をはかり、縄文文化研究の方法として生態学との協力が必要であることを強張し、遅れがみられるとされる九州地方貝塚研究の進展を望むものであり、実証的研究のためにささやかでも資するところがあれば望外のよろこびである。

末筆ではあるが、本稿をまとめるのをはじめ平素から筆者の縄文文化研究に関して御指導御鞭撻を頂いている賀川光夫先生、並びに平安博物館の渡辺誠先生の御好意に対し、この機会を借りて衷

心より謝意を表する次第である。(昭和47年11月27日脱稿)

- 註1 (a) 昭和36年11月、小池原貝塚(鶴崎市の依頼により別府大学考古学研究室が調査)。
 (b) 昭和40年8月、小池原貝塚・横尾貝塚(新産都計画により大分県の依頼で別府大学考古学研究室が事前調査)。
- 註2 (a) 喜田貞吉「九州旅行談」考古学雑誌、第8巻第7号所収、(大正7年、東京)。
 (b) 『日本石器時代地名表』第5版(昭和3年、東京)。
 (c) 酒詰伸男『日本貝塚地名表』(昭和34年、京都)。
 (d) 賀川光夫「所謂鐘ヶ崎式土器の層位的出土の新例(小池原式の設定)」『大分県地方史』34、(昭和39年、大分)。
 (e) 後藤重巳『みんなの考古学——大昔の人々の生活 小池原貝塚』(昭和39年、大分)。
 (f) 金子浩昌「貝塚と食料資源」『日本の考古学』Ⅲ(昭和40年、東京)。
 (g) 賀川光夫・橘昌信「小池原貝塚」『大分県文化財調査報告』第13輯(昭和42年、大分)。
 (h) 賀川光夫・橘昌信「横尾貝塚」『大分県文化財調査報告』第13輯、(昭和42年、大分)。
 (i) 賀川光夫『大分県の考古学』(昭和46年、東京)。
 (j) 賀川光夫『農耕の起源』(昭和47年、東京)。
- 註3 前掲書(註2、g・h)
- 註4 ベンケイガイ製2点、アカガイ製1点の計3点が出土しているが、未報告である。本稿では繁雑になるので具体的な記述は別の機会に譲る。
- 註5 植物質の遺存は貝塚にあって通常極めて稀ではあるが、ただ両貝塚より石皿・磨石等の植物質食料採集活動に関連する石器は出土している。当然この種の活動が存在したことが推定される。
- 註6 賀川光夫の前掲書(註2、i) P 127頁にみられる様に部分的遺骸の発見による。但し、賀川光夫の前掲書(註2、i)の、99~101頁の「食人の風習があった？」においては、宮崎県松添貝塚・長崎県脳岬貝塚の2例のみが九州でみられるとしている。
- 註7 直良信夫『古代日本の漁獵生活』(昭和21年、諏訪)93頁参照。
- 註8 馬目順一「鹿角製漁撈具と水産資源の獲得について」『寺脇貝塚』所収、(昭和41年、いわき)。
- 註9 小池原貝塚出土の漁撈具としては、前掲(註2、g)報告書において、骨鏃・骨製尖頭器があげられているが、前掲書(註2、i)に釣針・鏃・銚とされている、これは第一次調査の釣針が加えられている訳で、この三種3点が紹介されているのみである。しかし今回自然遺物を分類する際に小池原貝塚出土とされるもので、尖頭器(骨製)1点、エイの尾棘骨を使用した尖頭器2点がみられる。これらについては別の機会に譲るが、銚というよりはヤスが主であったとみられる。
- 註10 向坂鋼二「原始篇」『浜松市史』(昭和43、浜松)。